都道府県別賞一等

家族への感謝

栃木県　白鷗大学足利中学校　二学年

石川　大煌

先日、学校で生命保険についての漫画の冊子が配られた。中学二年生の私は、保険は大人が考える遠い話だと思っており、最初は全然分からなかった。しかし、パラパラと読み進めていくうちに、意外にも私たちの未来や夢に深く関係していることが分かった。最も不安に思ったことは、将来にかかるお金の話だ。私の夢はまだはっきり決まっていないが、なにか人に感謝されるような仕事に就きたいと考えている。しかし、高校や大学に進むだけでも何百万、何千万とかかる。さらに、その先の結婚や家を建てるのに何千万円もかかることを知り、驚いた。

私の家は父、母、兄、私の四人家族だ。父は毎日遅くまで働いている。私が「新しいゲームが欲しい。」と言ったら、「成績が上がったらね。」と言われてなかなか買ってくれないこともある。昔は『ケチだな。』と思っていたが、この冊子を読んで、家族四人の生活費、私と兄が学校に行くためのお金を準備するだけで両親はすごく大変なのだと現実的に感じた。そして私が今、毎日何不自由なく生活が送れているのは、二人が一生懸命働いているおかげなのだと思った。漫画には、そんな大切な生活が、ある日突然壊れてしまうかもしれないリスクについても描かれていた。病気やケガで入院したり、最悪の場合、両親が急に亡くなってしまったりすることだ。

小学五年生の時、父が盲腸になり救急車で運ばれ入院したことがあった。夜中にお腹を抱えてとても苦しそうだった。あんなに元気だった父が、病院のベッドでぐったりしているのを見て、すごく怖かった。父のそばで兄と泣いたのを覚えている。幸い手術は成功してすぐ元気になったが、あの時の母の不安そうな顔は今でも忘れられない。冊子の中で、リスクへの備えとして保険の話が出てきた。病気やケガといった、突然降ってくる、もしものアクシデントから家族を守ってくれる。もし、父が入院した時に保険に入っていなかったら、入院費や手術代で生活費までピンチになっていたかもしれない。冊子を読んで、あの時の怖かった記憶と今の生活が繋がった気がした。保険は私たち子供には関係ないと思っていたが、実は『私たちが毎日笑って過ごすための見えないバリアのようなものだな。』と思う。

冊子の後半では、たくさんの人から少しずつ保険料を集めて、誰かが困った時にその中から保険金を出し、保険会社が集めたお金で企業を支え社会全体に

役立っていることが書かれていた。その助け合いの仕組みを知り非常に良い仕組みだと思った。さらに驚いたのは、貯金と保険の違いだ。私もお正月のお年玉などを銀行に貯金しているが、貯金は貯めた分しか使えない。でも、保険は入ったその日から、もし何かが起きたら契約した分の大きな金額のお金が受け取れる。

この課題を通して一番感じたのは、父と母への感謝だ。家に帰って、母に「保険に入っているの？」と聞いてみた。母は少し驚いた顔をして、「大煌が大学に行った時や、家族に何かあった時のためにちゃんと入っているよ。」と笑って言ってくれて私はとても安心した。

私はまだ中学二年生で、自分でお金を稼ぐことはできない。しかし、重要なのは日常の中での心構えだと思う。毎日を大切に過ごして、しっかり勉強して、親に心配をかけないようにすることが、今の私にできるリスクへの備えなのかもしれない。そして、いつか大人になったら、私も父のように自分の家族をしっかりと守れる立派な大人になりたい。課題で読んだこの冊子は、遠い未来のことだと思っていたが、今の私から始まっている大切な設計図の話なのだな、と思う。